

第4学年 社会科学学習指導案

1. 小単元名「甘柿日本一の里，杷木をたずねよう」

2. 指導観

- 子どもたちは前小単元で，東峰村小石原地区について学習した。小石原焼の陶工さん，役場の人，小石原焼共同組合の人々の取組について調べ，地域の基幹産業である小石原焼を，地域全体で協力して守ろうとしていることを地域の特色として考えることができた。学び方の面では，学習問題に対して，教師が与えた資料をもとに，自分なりの根拠をもって考えをまとめる経験をしてきている。しかし，資料から自分の考えをつくる上で支援が必要な児童が多く，自分の考えと友達の考えの共通点を見付けたり，それらを自分なりにまとめたりすることも難しい。これから学習する杷木地区については事前のアンケートでは地名について「知らない」と答えた児童がほとんどであるが，果物を好きだと答えた児童が全体の約9割であり，家族でフルーツ狩を経験したことがある児童も2割程度いた。
- 本小単元では，朝倉市杷木地区を取り上げる。杷木地区は，広大な筑後平野の東側に位置し，南向きの山の斜面を利用して272haもの柿畑が広がっている。福岡県は甘柿の生産が日本一であり，県内の柿の産地の中でも，杷木地区の柿生産量は突出している。朝倉市の柿は県の地域産業資源に指定されており，地元の製菓会社と提携して開発した柿の糖蜜漬けは「地域産業資源活用事業」として国の認定を受けている。みちの駅「バサロ」では柿だけでなく柿の加工品も年中販売しており，秋には柿狩の観光客を集めている。福岡県の柿は色が濃く，大きくて甘みが強いことで人気がある。単元の導入で商品価値のない庭先の柿と，杷木で栽培された柿とを，見た目と味を比較することで，このような柿が日本一であるという事実に驚きをもたせることができる（感動性）。学習を通して柿農家の〇〇さん，JAの〇さん，朝倉市役所の□□さん，地域の製菓店の△△さんの取組を調べ，思いを考えることは，地域資源である柿を中心に，人々が協力して地域の力を高めていこうとしている地域の特色を考えさせることができる。（多面性）。
- 本小単元の指導にあたっては，であわせ方として，子どもたちにとって馴染みのない杷木地区に興味をもたせるために，杷木の風景写真を提示して具体的にイメージさせる。また，杷木で作られた柿を十分に観察させる。「見つめる」段階では，学習問題に対する自分の予想をもたせ，追究の視点を広げるために，前小単元で学習した小石原地区に立っている「陶の里」の看板写真を提示して，「小石原が陶の里とよばれていたのは，焼き物がたくさんつくられているからだけだろうか」と問いかける。「見分ける」段階では，杷木地区の特色を考えさせるために，前小単元で学習した小石原の「陶の里」の看板と小石原の学習であった人々の写真を提示して，「小石原も杷木も〇〇の里とよばれているけれど，ほかにも似ているところはないだろうか」と問いかける。「見極める」段階では，柿の農家数のグラフから，消費者の柿離れの事実を伝え，「もっと柿をたべてもらうためにどのような取組を行うべきか」と問いかける。

3. 小単元の目標

- 杷木地区の柿に携わっている人々の工夫や努力に関心を持ち，「柿の里」とよばれる杷木地区の特色について意欲的に追究することができる。（関心・意欲・態度）
- 杷木地区の人々のくらしの特色を，柿に携わる人々の工夫や努力，協力体制と関連付けて考えることができる。（思考・判断）
- 杷木地区の人々のくらしについて取材や見学をもとに調べ，考えたことをわかりやすく表現物にまとめて友達に伝えることができる。（技能・表現）
- 杷木地区の特色として，人々が協力して，地域の資源である柿を大切に守り広めていこうとしていることを理解することができる。（知識・理解）

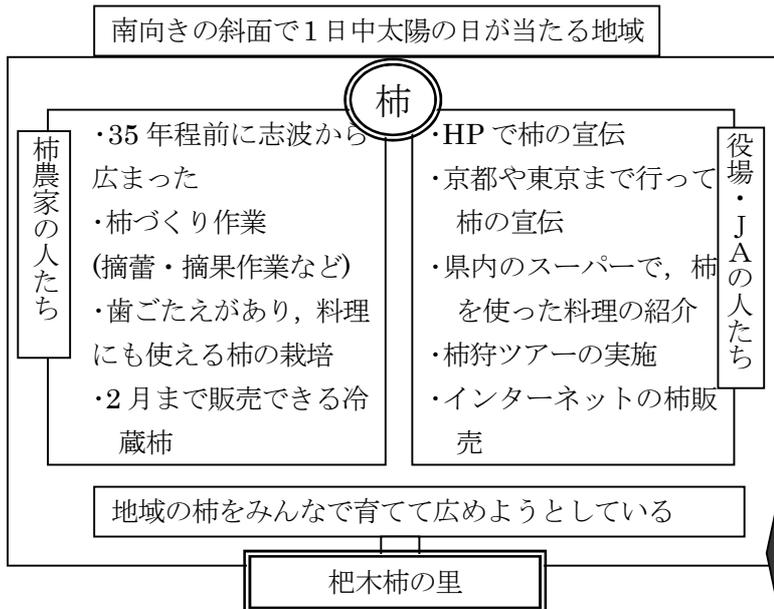
4 3. 「柿の里」とよばれるわけについて視点ごとに調べ自分の考えをつくる。

- ③ (1) 視点ごとに調べる。
- 柿づくり農家の工夫や努力
 - ・ 1年間の作業の工夫や努力
 - ・ 品種改良された歯ごたえのよい柿「太秋」
 - ・ 販売の時期を長くするための冷蔵柿
 - ・ たくさんの柿を出荷するための工夫や努力
 - 杷木の柿を広めている人の工夫や努力
 - ・ 朝倉市役所のHP
 - ・ JAのHP
 - ・ 県内のスーパーでの店頭販売
 - ・ インターネットの柿販売
 - ・ かき収穫体験ツアー

- ① (2) 自分の考えをつくる。
- 自分の考えを表現物にまとめる。

1 4. 学習問題の答えについて話し合う。

(1) 調べたことを根拠に、学習問題の答えを話し合う。



(2) 前小単元の小石原との共通点を考える。
 ※小石原が「陶の里」とよばれていたことを想起させ、人々の取組を中心に共通点を考えさせる。

見極める

- 1 5. 杷木の柿作りのこれからについて話し合う。
- (1) 「柿農家の数」のグラフから、杷木の柿農家の数が減少していることを知る。
- (2) 杷木の柿をこれからも柿の購入量を増やすために、どうすべきか考えを出し合う。
- (3) JAの〇〇さんからのビデオレターから、実際に行われている取組について知る。

- 考えの交流で生かせるように、柿づくりの概要や柿に携わる人々の取組を載せた共通の資料集を与える。
- 資料集で調べた内容をより深めた考えをつくることができるように、現地を見学して実際に見たり話を聞いたりする。
- 効率よく見学ができるように、子どもたちが調べたいことや、伝えてほしい事項を事前に先方に依頼しておく。
- 自分の考えをわかりやすく説明するために、根拠となる資料をもとに表現物をつくる。

見分ける立ち止まり

杷木の地域の特色を考えさせるため。

前小単元の小石原にある「陶の里」の看板と、焼き物づくりにかかわっている人々の写真を提示して、共通することを問いかける。

見極める立ち止まり

杷木地区の将来について考えさせるため。

杷木の柿の購入量のグラフを提示して、購入量を増やすためにはどうすべきか問いかける。

第4学年 本時指導案

「学習問題をつくり，自分なりの答えの予想をもつ場面」（2／9時）

5. 本時目標

- 提示された資料を見て話し合い活動をする中で学習問題を作り，自分なりの予想をもつことができる。
(思考・判断)
- 提示された資料について考えたことや気付いたことを，分かりやすく発表することができる。
(技能・表現)

6. 本時学習にあたって

前時までに子どもたちは，地図帳で杷木の位置をとらえ，写真で杷木の風景を目にしている。居住している〇〇校区と比較することで，山が多い・木が多いということもとらえている。さらに，柿畑の写真を見ることにより，杷木で柿作りが行われていることも知っている。

そこで本時では，具体物・写真・グラフなどの提示された資料を見て話し合い活動をする中で，学習問題を作り，自分なりの答えの予想をもつことができることをねらっている。

そのために，本時では，次のような手立てをとりながら学習を展開していく。

- 柿に親しみ，杷木の柿の特徴をとらえるために
 - ・ グループに1個の杷木でとれた柿を用意し，手でさわるなど充分観察する時間をとるようにする。
- 杷木では柿がたくさんとれるということを考えさせるために
 - ・ 「杷木柿の里」という看板の写真を見せ，「どうしてこの看板が出ているのだろう。」と考えさせる。
 - ・ 「柿の県別生産量」グラフを提示し，グラフを見て気付いたことや分かったことを話し合わせる。
- 杷木が「柿の里」とよばれていることに対して予想をもたせ，追究の視点を広げるため
 - ・ 前小単元で学習した「陶の里」という看板写真を提示し，人々の取組に目を向けさせる。
- 子どもたちが出し合った予想が，よりわかりやすくなるように
 - ・ 板書や見出しカードにより視点ごとに整理していく。



【 「杷木柿の里」の看板 】



【 「陶の里」の看板 】

7. 本時の展開

□：ねらい ■：手立て

主な学習活動と内容	立ち止まりと子どもの姿
<p>1. 前時を想起し、学習のめあてを確かめる。</p> <div data-bbox="209 286 1034 371" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>めあて 学習問題を作り、自分の予想を考えよう。</p> </div> <p>2. 杷木の柿を見てその特徴を知る。</p> <p>(1) 杷木の柿と福岡の柿を見て比較する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・杷木の柿は、きれい。 ・杷木の柿は、大きい。 ・杷木の柿は、つやがある。 ・杷木の柿は、おいしそう。 <p>※グループに杷木の柿と福岡の柿を渡すようにする。 ※福岡の柿は、近くの柿の木からちぎってきたものとする。</p> <p>(2) 杷木の柿を賞味してみる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・甘い ・おいしい <p>3. 資料をもとに学習問題をつくる。</p> <p>(1) 「柿の県別生産量グラフ」を見て、考えたことや気付いたことを話し合う。</p> <p>○福岡県の柿のとれ高は、和歌山県に次いで全国2位。 福岡県の甘柿の生産は、全国1位。</p> <p>(2) 「杷木柿の里」の看板写真から、杷木が「柿の里」とよばれていることを知る。</p> <div data-bbox="240 1095 951 1193" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><学習問題> なぜ、杷木が柿の里とよばれるのだろう。</p> </div> <p>4. 学習問題の答えについて話し合い、自分なりの予想を考える。</p> <div data-bbox="185 1305 616 1682" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>杷木の柿がきれいだからだろう 杷木の柿がおいしいからだろう 杷木では柿がたくさんとれるからだろう。 杷木には柿を作っている人がたくさんいるのだろう。 杷木では昔から長い期間、柿が作られているのだろう</p> </div> <div data-bbox="632 1305 1038 1682" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>杷木の柿が有名なのだろう。 杷木の柿を宣伝している人もいるのだろう。 杷木の柿を宣伝するための施設もあるのだろう。 杷木では柿作りがしやすいように、役場の人も手伝っているのではないか</p> </div> <div data-bbox="185 1738 616 1783" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>柿作り農家の工夫や努力</p> </div> <div data-bbox="632 1738 1038 1783" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>柿を広めている人の工夫や努力</p> </div> <p>※次時の追究の視点が明確になるように、出てきた予想を板書と見出しカードで整理していくようにする。</p> <p>5. 「今日の学習で」を書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○杷木がなぜ柿の里と呼ばれているか。 ○自分の予想がどうだったのか。 	<p>○杷木の風景を思い出している。</p> <p>○杷木の柿は、大きい。 ○杷木の柿は、色がきれい。</p> <p>○杷木の柿は、甘いね。 ○杷木の柿は、おいしいね。 ○杷木では柿がたくさんとれるのだろう。 ○福岡県の柿の生産は全国2位だ ○甘柿の生産は1位なんだなあ。すごいなあ。</p> <p>○柿の里とよばれるのは、柿がたくさん作られているからかな。</p> <div data-bbox="1066 1178 1422 1738" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p style="text-align: center;">見つめる立ち止まり</p> <p>□杷木が「柿の里」とよばれていることに対して予想をもたせ、追究の視点を広げるため。</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>■前小単元で学習した小石原地区に立っている「陶の里」の看板写真を提示して、「小石原が陶の里とよばれていたのは、焼き物がたくさんつくられているからだけだろうか」と問いかける。</p> </div> <p>○柿を作っている人だけでなく、柿作りを支えている人たちがいるから柿の里とよばれるのかな。</p>

第4学年 本時指導案

「柿生産の現状から、今後の柿づくりについて考える場面」(9/9時)

5. 本時目標

- 杷木で柿作りを続けるためにどうすべきか、自分の考えを分かりやすく表現することができる。
(技能・表現)
- 杷木の柿の生産を増やすための取組から、杷木地区の特色について、考えを深めることができる。
(思考・判断)

6. 本時学習にあたって

前時までに子どもたちは、「なぜ、杷木が柿の里とよばれるのだろうか」という学習問題をもとに、調べ学習を行ってきた。「柿がたくさん作られるから」「柿作りをしている人がたくさんいるから」「杷木の柿の人氣があるから」などという予想をもとに、「柿作り農家の工夫や努力」「杷木の柿を売り出している人の工夫や努力」を視点を調べ学習を進めた。「柿作り農家の工夫や努力」としては、南向きの山の斜面を生かしてそれまでは一部の地域で栽培されていた柿を杷木地区一帯に広めた歴史や、美味しい柿をつくるために1年中努力していること、出荷の時期を長めるために冷蔵柿を出荷している取組などを調べてきた。また、「杷木の柿を売り出している人の工夫や努力」として、インターネットのホームページで宣伝していることや、柿収穫ツアーを実施していることを調べ、自分たちの考えをつくった。

前時では、それぞれが調べてきたことをもとに学習問題の答えを話し合った。杷木が「柿の里」とよばれているのは、柿作り農家の方々が、美味しい柿をたくさんつくるために工夫や努力を行っていると同時に、地域の人々が杷木の柿を広めようと様々な取組を行っているからだという学級としての考えをもった。更に前小単元で学習した「陶の里」とよばれる小石原と、本小単元の「柿の里」とよばれる杷木の共通点を考えた。小石原は陶器を中心に地域の人々が協力しているのに対して、杷木は柿を中心にみんなで協力しているのだという意見が出た。

そこで本時では、福岡県の柿農家が減少している事実から、これからの杷木の柿作りについて考えを深めさせることをねらいとしている。

そのために、次のような手立てを取りながら学習を展開していく。

- これからの柿作りに危機感をもたせるために
 - ・ 「柿農家の数」のグラフを提示して、消費者の柿離れの事実をとらえさせる。
 - ・ 後継ぎは必要ないという柿農家の方の話を伝える。
- もっと柿を食べてもらうためにどうすべきか、子どもたち一人一人の考えを表現できるように
 - ・ 消費者の柿離れの理由を提示して考えのヒントにできるようにする。
 - ・ 個人で考える時間を十分にとり、「小グループ」→「クラス」と段階的に考えを述べる形態をとる。
- 柿の購入量を増やすために実際に行われている取組を理解させるために
 - ・ 年間を通して柿を使用するための「柿の糖蜜漬け」や学校給食への柿の使用、保育園への無料提供について、携わっている方々の話を編集してビデオで提示する。

